

## 海外論文発表奨励賞復活に際して



海外交流

野村正勝\*

Some views on the revival of  
Awards for promoting oversea oral presentation.

Key Words : reopened prize, announcing the article abroad, encouragement

生産技術振興協会が海外の国際会議などで研究成果を発表する理系の研究者の支援に乗り出したのは平成6年であった。実は私もこの制度を利用して大学院の学生に申請をするよう促し、奨励賞をいただいた経験を持つ。この制度は選考委員会を設け受賞者20名を対象に協会の新たな事業、海外渡航費助成事業として出発したのだった。その後平成16年度まで継続してから、財政的な問題で閉じた経緯がある。

今回、当協会が大阪大学と緊密な関連をもちながら新しい協会運営へ踏み出し、新しい方向性も打ち出せつつあるのを機会に、規模は半分ながら大阪大学へのささやかな学術的貢献の一つとして平成23年度から海外論文発表奨励賞と名称を変え、再出発を図ることになった。いずれ以前の規模に戻したいと考えている。

今、当協会は大阪大学の外国語学部、工学部、理学部、基礎工学部、情報学部、医学部、歯学部、薬学部、産業科学研究所の先生方に「生産と技術」の季刊誌発行に尽力をいただいているが、選考はこれらの編集委員会の先生方をお願いすることになった。

私の以前の研究室の例でいえば、博士後期課程の学生には、進んで国際会議へ出るように指導し、プロジェクトの研究費から彼ら彼女らの国際会議の登録費と旅費を、すべてではないものの、出していた

が、最近はこの費用の運用が厳しくなっていると聞いている。私見であるが、登録費全額と旅費の半分ぐらいは支援して残りは私費で賄うのが、本人のためにはいいのではないだろうか。本気度が増すだろうからである。

私らの時代は大学院の学生が国際会議へ出ることは皆無であった。私は38歳でカナダのアルバータ大学へポスドクとして雇われたが、旅費となる校費がなく生産技術振興協会へ自身で寄付をして、それでやっと海外へ出ることが出来たのであった。当時、通産省の研究所の研究者らは東京の本庁で英語の訓練を受け、最後は英語のガイド実習が仕上げであったと聞いた。

その後、海外へ行く機会が想像以上に増え、数え切れないほど参加したが英語での受け答えが上手くならなかった。或る時、正確に言うと文部省から訪問教授として米国に2ヶ月滞在した折、ピッツバーグで開かれた国際会議に出たのだが、製鉄関連の企業からこられていたその分野の著名な研究者と英語学習のことで雑談した。その方は「英語の勉強などあきらめなさい」と私に言われた。勿論ヒアリングを含むスピーキングのことなのだが、この能力はまさに特異的で、人さまざまなのである。

今、私はある財団で青少年交換(16歳から18歳)のボランティアをしている。このプログラムは極めて特徴的である。二つの国の高等学校の生徒をお互いに交換し、原則、相手国の学生を、子女を出した家庭が一年(友人、親戚で分担してもよい)預かるのである。申請してくる学生は私学の高校生が多い。かなりの学生が両親に尻を叩かれていやいや参加する場面が多い。勿論、中には語学勉強に、また小田実的に「何でも見てやろう」精神もあるにはある。片言の英語をしゃべるのがやっとなんかという連中が、向こうの高校で苦労しながら1年たって帰ってくると、



\* Masakatsu NOMURA

1940年6月3日生  
大阪大学大学院 工学研究科応用化学  
博士課程修了(1969年)  
現在、(社)生産技術振興協会 理事長  
大阪大学名誉教授 工学博士 応用化学  
TEL : 072-758-4995  
FAX : 072-758-4995  
E-mail : m-nomura@muf.biglobe.ne.jp

見違えるような、本当に顔が変わって帰ってくる。彼ら彼女らの行先は英語圏だけでなくフランス、スウェーデン、ドイツ、スペイン、フィンランド、ポーランドなどと極めてカラフルである。もちろん全ての学生が語学上の成果を上げて帰ってくるわけではない。失敗例もある。しかしこの時期に外国で過ごした学生たちの発音は私にはまねることが出来ない優れた音感をほぼ例外なく習得している。

2008年にノーベル物理学賞を受賞した益川俊英先生は、中学で習う英語の発音の時間が大嫌いであったと述べているが、私もなぜこんなに発音を勉強するのか当時、全く理解できなかった。教科書の表紙の裏側に記載されていた口蓋の断面図が今も脳裏に蘇る。

話がそれるが益川先生は学士会報で次のようなことを述べておられる。湯川秀樹先生が大阪大学の講師の時、今では否定されている広がりのある素粒子論に踏み込まれ5年間何の成果も出せなかったとき、当時研究室の主任だった八木秀次先生が叱咤激励してやっと書きあげたのがノーベル賞となった中間子論であった。この事実を知る人は皆無だろう。

さて話を戻すが、私たちの青少年交換のプログラムに關与する人たちは、あの発音を身につける年齢的限界が高校生の年齢ではないかと実感している。

昨年トルコで開かれた私たちの国際会議に参加したが、日本の大企業から小柄な女性が参加されていた。彼女は自身の講演で様々な質問を見事に答えておられ、また的の得た質問をされ、そのセッションを大いに盛り上げておられた。私は彼女に不躰ながら「TOEICは何点を取られているのですか」と聞くと900点以上であった。これまでの私の経験から言うと国際会議で活躍しようとするればこのレベルの

能力が要るように思う。また、この能力の維持が難しいと聞く。多くの日本の方々はこれを理解しない。だから語学力(特にヒアリングとスピーキング力)というものを評価しない。

私はいつも思うのだが、決して安くはない授業料をとっているのだから、せめて大学の学部卒業生が英語ぐらい容易にしゃべれるような能力をつけてやるのは大学として当然のことではないかと考える。

それから国際会議へ行く大学院生や研究者がいつでも参加できるような夜間の語学クラスを常に大学は準備すべきではないか。以前からこう考えてきたが、最近の語学習得の仕掛けは素晴らしく、フィリピン大学の卒業生が英語をスカイプ経由で廉価に教えてくれる仕掛けがあったり、これに類似したもう少し高度なプログラムもある。映画で英語のシナリオ勉強を楽しむソフトも大型書店に行けば廉価で数多く売っており、英語勉強の環境は今や十分すぎるほどである。しかし、そうであるとしても大学では外国語がどこでもあふれ出ているような環境であってほしいと思う。

私も英語に関しては「書く、読む」はそれほど衰えているとは思わないが、聴力の低下は如何ともしがたく、とくに高音、これは英語の子音に深く関連するが、聞けなくなってきた。

教官の英語力(語学力、たとえばTOEICの得点)を計量し(勿論他の外国語能力も追加評価する)、評価軸に組み込めば、研究者のトータルとしての評価は案外、平準化するのではなからうか。評価を目的化した柔らかさのない組織からは世の中を変える強い創造力は生まれてこないだろう。自由で闊達な、そして使命感あふれる空気こそ大学に不可欠である。

